

三島由紀夫

三枝康高編

有信堂版



三島由紀夫・その運命と芸術

¥ 900

1971年3月25日 初版第1刷発行

編者 ^{さえ}三 ^き枝 ^{やす}康 ^{たか}高

発行者 増 永 勇 二

発行所 印刷 日本製版 製本 エイト製本

東京都文京区本郷 5-30-20

電話 (03)813-4511(代)(郵便番号113-91)

振替東京141750

京都市左京区百万遍 (郵便番号 606)

電話(075)781-3652 振替京都 23523

0395-000696-8607

三島由紀夫・その運命と芸術

目次

その運命

三島由紀夫	川端 康成	3
三島由紀夫の青春について	石原慎太郎	7
理解されなかった三島由紀夫	本多 秋五	15
美意識の効用と危険	山田 宗睦	41
ナルシシズムの運命	神西 清	61
三島由紀夫	佐伯 彰一	79
三島由紀夫論	寺田 透	97
三島由紀夫の戯曲について	尾崎 宏次	129
三島由紀夫における古典	中西 進	139

その芸術

「文芸文化」との出会いと
初期作品

高田 瑞穂 151

聖セバスチヤンの顔

花田 清輝 161

——『仮面の告白』評——

三島由紀夫と中世能楽

吉田 精一 173

『潮騒』——三島文学の素顔——

鳴岡 晨 191

『金閣寺』について

中村 光夫 205

三島由紀夫の家

江藤 淳 221

——『鏡子の家』——

二・二六事件と文学

三枝 康高 241

——『英霊の声』『哀』など——

三島由紀夫のナシヨナリズム
——『喜びの琴』『朱雀家の滅亡』
より『豊饒の海』へ——

松本 鶴雄 253

シヨルジュ・バタイユと
三島由紀夫

清水 徹 273

*

《^特レポート》三島由紀夫の死

三枝 康高 283

三島由紀夫略年譜

鈴木 恵子 307

その運命

三島由紀夫

川 端 康 成

その人の死に愕き哀しむよりもその人の生に愕き哀しむべきであつたと、餓洗の思ひが頻りである。身近の死には自分の心が足りなかつた故といふ痛みが必ずあるもので、私も幾度かこの悵悵を新にする度、自分の死の覚悟とは縁深い人々にいつ死なれてもその人の生を自分は大切に出来たと言へるところにも立たねばならぬと省る。——昭和二十年「片岡鐵兵の死」といふ文章を、私はこんな言葉で書き出した。その後も身近な人の死に遭つて、私はこの言葉のやうな思ひをした。それはあまりにしばしばあつた。人の死のかなしみに遭はないためには自分が死ぬよりほかはないと言ひたいほどにもしばしばであつた。十一月二十五日は細川護立さんの葬儀に参列してゐて、その終つた午後二時、斎場の前で車を待つ時に、松本重治君から三島君のことを聞いた。細川家の令嬢の表千家の若宗匠宗員さんとの婚礼に私夫婦は媒酌人であつたので、細川家の葬儀に私は家内を伴つてゐた。三島君の家に行かうかと家内も言つた。し

かし、動き出した車でラジオのニュースを聞くと、三島君の遺骸はまだ市ヶ谷の自衛隊にあるらしいので、とにかくそこへ行つてみることにした。自衛隊の人たちは私をいねいにいたはつてくれた。私がそこで三島君の遺骸に直面したと、ある新聞に出てゐたのはあやまりである。すでに警察のしらべがはじまつてゐて、総監室には近づけなかつた。二階のその部屋に行く階段に立つてゐたところを、やや離れた事務室へみちびかれた。そこで若い女の事務員が茶を汲んで来てくれたのは、じつに思ひがけなかつた。自衛隊の裏門から出してもらつて、私たちは三島君の家へ行つた。その夕暮れの町道に見る、いつもと変りない人々の動きも私にはふしぎなようであつた。

三島君の家から鎌倉に帰つて夜半近く、舟橋聖一君から電話がかかつて来た。舟橋君自身のかなしみを訴へ、私のかなしみをなぐさめるためであつた。舟橋君は三島君の死を「憤りの死」、「美しい死」と言つた。舟橋君はそのことを「東京新聞」の二十六日の夕刊に書いてゐる。舟橋君が電話をくれたのはありがたかつた。また、三島君が自分の最もよい理解者とした伊沢甲子磨さんは、「もし、打ち明けてゐてくれれば、いつしよに死んだでせう」と語つてゐる。私はただなんとか諫止するすべはなかつたかと悔むばかりである。私は三島君の「楯の会」に親身な同情は持たなかつたが、三島君の死を思ひとどまらせるには、楯の会に近づき、そのなかにはいり、市ヶ谷の自衛隊へも三島君についてゆくほどでなければならなかつたかと思ふ。三島君をうしなはぬためにはそうしてもよかつたと考へてみたりするやうな、それも後からの歎きに過ぎぬ。

私は三島君の少年時代の文章を見せてもらったことがある。その「童話の領分」は七歳から十六歳までの作品、その「詩の領分」は十二歳から十七歳までの作品、また「学習院輔仁会雑誌」に十六七のころ書いた小説には、後に新しい作家の三島君があり過ぎて驚いたものである。——三島君の初めての長編小説「盜賊」の序文に私は書いてゐる、それらの「少年時代の文章」の一束を私が一時預かつたのは、二十年前のことだが、その序文にはかうも書いてゐる。——私は三島君の早成の才華が眩しくもあり、痛ましくもある。三島君の新しきは容易に理解されない。三島君自身にも容易には理解しにくいのかもしれぬ。三島君は自分の作品によつてなんの傷も負はないかのやうに見る人もあろう。しかし三島君の数々の深い傷から作品が出てゐると見る人もあろう。この冷たさうな毒は決して人に飲ませるものではないやうな強さもある。この脆そうな造花は生花の髄を編み合わせたやうな生々しさもある。

私は年少（二十三歳）の友人の作品に行きとどかぬ理解で序文を書く心おくれで、あいまいなことを言つた。しかし自分が親愛し敬尊する作家ほどかへつて自分に理解がおよばぬと思ふふしはある。私にとつて横光利一君の文学がそうであつた。三島君の死から私は横光君が思い出されてならない。二人の天才作家の悲劇や思想が似てゐるとするのではない。横光君が私と同年の無二の師友であり、三島君が私とは年少の無二の師友だつたからである。私はこの二人の後にまた生きた師友にめぐりあへるであらうか。私は三島君の「豊饒の海」の第一部、第二部の出版に際して、讃歎の広告文を書いた。私はこの長編を「源氏物語」以来の日本小説の名作かと思つたのであつた。——三島君の死の行動について、今私はただ無言で

6

る
たい。
。

三島由紀夫の青春について

石原 慎太郎

三島氏に青春は在り得たのだろうか、と言うことを私はいつも考える。

勿論、三十を越した氏にも二十代はあり十代があり、氏と同年齢の人間たちが過して来たと同じ時間に氏も生き、同じ社会現象を享受して来たことは当然だが、それらの若い日付けの時間の内で、所謂「青春」が氏にとってどのような形であつたのかと云うことを私は氏がその時代に書いた作品を読む度に考える。

私の言う青春は氏がよく言う所謂文学的に料理された青春でもなければ、氏が最も大きな文学テーマの一つとして志した小説によって客観化された明晰で堅固な青春でもない。

それらの青春は、観念化の料理に形造られながら、或は完全な客観化によって訣別されながらも、いずれにしろ一度氏の手によって、と云うより、氏の頭脳によって所有されたに違いないが、私の言うのは三

島氏がその身を頭の上まで沈めてひたした、言わば観念の操作をも含めて肉体的な青春のことだ。つまり、氏の表現を借りれば、氏は果して、青春と一緒に寝たことはあつたのだろうか。

「小説家の休暇」の中で、氏は、

「私はあのころ実生活の上では何一つできなかつたけれど、心の内には悪徳への共感と期待がうづまき、何もしないでゐながらあの時代とまさに、『一緒に寝て』ゐた。どんな反時代的ポーズをとつていたにしろ、ともかく一緒に寝てゐたのだ』と言っている。

がしかし、更に後になつて、

「われわれは文学的に料理された青春しか知らないし、自分の青春もその真似をして、のつけから料理してかかつてゐたのである」

とも言っている。

背反する二つの告白の内、私は氏にとって後者が正しいと思う。そして冒頭の、われわれ、という代名詞を、氏は氏一人の一人称に書き改めるべきでもある。

青春というものを、氏をくるめてわれわれすべてが畢竟文学的に料理されたものしか知らないと言う断定の中に、作家としての、と言うより「三島由紀夫」の如き作家に成らねばならなかつた氏と言う特異な人間の資質が顕著にある。

「小説家の休暇」にある、終戦直後の時代への回想には、何もしないでいながらとあるが、たとえ未だ

にペンをとらずにいながらもすでに、氏の「心の内には悪徳への共感と期待がうづまいて」いた。つまり氏はすでに氏一人の小説を書いていたのだ。小説を書くこと、つまり心の内での悪徳への共感と期待は、結局共感と期待でしかない。

と言つても同氏を非実行家として否むつもりではない。氏にとって一番大切な実行は、悪徳にわが身をたち入れさせるのではなく、悪徳への共感と期待を抱くこと、そう言う形で己に小説を書かせること、それを時代と一緒に寝ていると信じさせることなのだ。

つまり何と言おう、氏は最もそうし易かったあの時代ですら決して時代と一緒に寝たことはなかった。良い意味でも悪い意味でも密着とか耽溺とか言う言葉は三島氏にとって疎遠なものでしかない。何と言おう、とその間隙こそが氏の作家としての稀有なる資質に他ならない。つまり、一緒に寝ていると自ら言う時ですら、氏は常に醒めている。

氏のそうした資質は文学に直接関係ない氏の日常の行事にも端的に現れている。末端の例だが、氏がいかにスポーツに嗜好しようと、氏は決してスポーツマンには成り得ない。代りにもし氏が志すならば、氏は既にいるいかなるコーチャーにも増してすぐれたコーチャーとしてスポーツのエステイックを造り上げる事が出来るだろう。

嘗つて氏は町内の祭りで神輿をかついだ。その鮮かな報告を私は雑誌で読んだが、あの言わば最も原型的な興奮のうず巻きの中ですら、氏は矢張り醒めているのである。氏は決して他の町内の若い衆と同じよ

うには神興に酔いはしなかった。その意味で氏は或は、神興をかつきはしなかったとも言える。

同じ論理で、私は氏にとって俗な意味での青春が在ったろうかと言うことを感じるのだ。

——文学的に料理された青春しか知らなかった云々に続いて氏は、

「私は或るとき翻然とそれに目ざめ、爾来、文学的、および観念的な青春と言うものを一切信じなくなつてしまつた。それからまた若くなつたのである。主観的に見た青春は、形もなく、モヤモヤした不透明な気味の悪いものだが、客観的に見た青春は、明晰な形のはつきりした堅固なものである」と言っている。氏がそれに目ざめた時、というのは、「金閣寺」に関わりある時期であろう。△そして氏は文学と言う手段によつてようやく青春を明晰な堅固なものとして客観化することに成功した。その記念碑が「金閣寺」に他なるまい。

しかし、その時から私は若くなつた、というのは氏の一種逆説的な宣言であつて、正確に言えば、「金閣寺」を境いにして、青春はもはや氏にとつての大きな文学的テーマたり得なくなつた。それはその後の氏の芸術の変貌をもつてすればうなずけよう。氏は「金閣寺」をもつて、小説を書き出してから十数年抱きつづけて来た主題の殻を離れたのである。

後年の文学史家が三島氏の軌跡をたどり直す時に、「金閣寺」を境いに氏の二十代から三十代への転位、青年から壮年への変化と並行して青春に対する氏の文学テーマが見事に整理されているのを見るだろう。

そして本巻に収録された他の三編（編者注・「仮面の告白」「青の時代」「沈める瀧」）は、「金閣寺」に完成された、己が時代の青春を